

世界の中の日本2016

堀内 修

■ パリ、ミュンヘン、ニューヨーク

一流の歌劇場は変わらず一流の歌劇場、ではあるけれど、いつも同じ水準を保っているとは限らない。オペラの世界はダイナミックに動いていて、スポーツのような勝ち負けこそないが、それ以上に熾烈に、歌劇場ごと音楽祭ごとの上演の質を競っている。

2015 / 16年のシーズンの、めざましかった歌劇場として挙げられるのは、まずパリ・オペラ座だろう。エクス・アン・プロヴァンスの音楽祭やミラノ・スカラ座で実績をあげた辣腕の劇場支配人、ステファン・リスナーが総監督となった最初のシーズンだった。音楽監督フィリップ・ジョルダンと組んで、いくつもの注目すべき上演を送り出した。ロメオ・カステルッチが演出した《モーゼとアロン》やクリストフ・ワリコフスキが演出した《青ひげ公の城》、ヨナス・カウフマンやブリン・ターフェルが出演した《ファウストの劫罰》、アンナ・ネトレブコが歌った《トロヴァトーレ》など、人気になった上演も新作も、絶賛されたオペラも賛否両論が渦巻いたオペラもある。そしてパリ・オペラ座はこのシーズン、とりわけ活気ある歌劇場になった。

さらに好調なのはミュンヘンのバイエルン国立歌劇場だ。ベルリン・フィルの次期監督となるキリル・ペトレンコを擁し、アニヤ・ハルテロスやヨナス・カウフマンなどのスター歌手が定期的に歌うミュンヘンは、最も好調な歌劇場だろう。キリル・ペトレンコ指揮、ハンス・ノイエンフェルス演出によるミロスラフ・スルンカの新作《南極》世界初演や、ペトレンコが指揮し、ヴォルフガング・

コッホやカウフマンが歌った《ニュルンベルクのマイスタージンガー》など、注目される上演が並んだ。

ニューヨークのメトロポリタン・オペラは、ピーター・ゲルプが総裁になってから取り組んだ「ライブビューイング」により世界中でその上演が映像として紹介されている。影響力は、日本も含め大きい。2016年も、ウィリアム・ケントリッジ演出でマルリス・ペーターゼンがタイトル・ロールを歌う《ルル》や、ファビオ・ルイーダが指揮し、クリスティーン・オポライスとロベルト・アラニャが共演した《マノン・レスコー》など、話題の上演をくり出した。映像によりメトロポリタン・オペラの上演に親しんでいる人の数は多く、ニューヨークはオペラの大きな拠点となっている。

伝統からいえば他を圧しているミラノのスカラ座だが、毎シーズンすばらしいとは限らない。2015 / 2016年のシーズンはというと、期待は大きかったものの、最高のシーズンということにはならなかったようだ。だがチューリヒ歌劇場やザルツブルク音楽祭でめざましい成果を収め、パリのリスナー以上に辣腕で知られる総監督アレクサンドル・ペレイラのもと、スカラ座はオペラ・マニアのメッカから、より一般的なオペラ・ファン向きへと、ほんの少し舵を切ったかのように見える。とはいえシーズンのオープニングは、ネトレブコ主演ながらヴェルディのボピュラーとはいえないオペラ《ジョヴァンナ・ダルコ》だった。しかしその後、スカラ座が独自に制作した上演こそ多くないものの、《西部の娘》《ばらの騎士》《魔笛》《ねじの回転》

と、新しく高水準の上演を行ない、新しいスカラ座を強く印象づけた。ムーティ以来ようやく音楽監督となったリッカルド・シャイーのもと、スカラ座はいまも特別な存在であり続けている。

オペラの音楽祭としては、2016年の夏もザルツブルクやバイロイト、エクス・アン・プロヴァンスやペーザロ、そしてグライントボーンやヴェローナが世界中からファンを集めることになった。かつてシーズン・オフであった夏も、いまではすっかりオペラの重要な季節として定着した。日本から訪れる人の数も増え、またテレビで上演が放映される機会も増えて、ザルツブルクやバイロイトの上演は、はるか遠くの出来事ではなくなってきている。

バイロイト音楽祭の新制作は《パルジファル》で、急な交替のため短期間で準備することになったウヴェ・エリック・ラウフェンブルクの演出が、中東問題と宗教間の和解を取り上げた上演として話題になった。ザルツブルクの聖霊降臨祭と夏の両方の音楽祭で、ミュージカルであるバーンスタインの《ウエストサイド物語》が上演されて話題になった。

■ ウィーンのアペラ…とアペレッタの年

2016年の海外歌劇場日本公演で1番注目されたのは、ウィーンからの2つの歌劇場の公演だった。春にウィーン・フォルクスオーバーが東京で3つのアペレッタを上演し、秋にウィーン国立歌劇場が東京で2つのアペラ、横浜で1つのアペラを上演した。

かつて日本の音楽ファンはウィーン好きで、ウィーンと名が付きさえすれば喜んで聴きに行く、と言われたりした。最近様変わりしているが、音楽におけるウィーン神話は、なおも生きているようだ。ただし国立歌劇場

とフォルクスオーバーの公演は、それが内容のない神話ではなく、正しい判断を伴った、ウィーン好みであることを、はっきり証明することになった。

フォルクスオーバーは必ずしもアペレッタ専門の歌劇場ではなく、アペラも多く上演するし、ミュージカルも上演している。だが日本ではもっぱらウィンナ・アペレッタのメッカとして支持されている。ウィーン国立歌劇場連盟に属し、国立歌劇場同様9月から6月までのシーズンで上演している。

フォルクスオーバーは2016年の東京公演でヨハン・シュトラウスⅡ世《こうもり》、レハール《メリー・ウイドウ》、カールマン《チャルダッシュの女王》を上演した。日本でも人気が高い2つの定番と、それに次ぐポピュラーなアペレッタの組合せだ。

《こうもり》はハインツ・ツェドニク演出で、新国立劇場と同様ながら、上演は大きく違っていた。オルロフスキーを知名度の高いアンゲリカ・キルヒシュラーガーが歌い、それなりの効果をあげていたのだが、肝心なのはオーケストラも含めたフォルクスオーバーのアサンブルで、洒落なウィーン風上演を実現させ、それを求めている日本の観客に応えた。総監督のロベルト・マイヤーがフロッシュ役で出演し、一流の演技でこのアペレッタの喜劇的な面をかもし出したのも評判になった。

《メリー・ウイドウ》もマイヤーがニェグシュを演じて、上演に軽味を与えたのだが、やはりハンナとダニロのコンビが堂に入っていたのが大きかった。目をみはる上演ではなかったとしても、ウィーンの《メリー・ウイドウ》の世界を求めてやってきた人たちは、望み通りのものを手に入れたはずだ。

ほんの少しだが、《チャルダッシュの女王》は定番からはずれていて、つまり2016年の

公演が目玉だった。日本でもウィンナ・オペレッタの指揮者として親しまれていたルドルフ・ビーブルが指揮したのだが、華やかさにわずかな哀感も加えた、まさにウィーンの《チャルダシュの女王》を実現させた。2017年の1月に亡くなって、これが日本への最後の挨拶となった。

音楽監督だったフランツ・ウェルザー＝メストが辞任して、パリやミュンヘンのようにいま絶好調というわけではないウィーン国立歌劇場だが、日本公演では世界に冠たる歌劇場としての実力を、改めて示したのではなかったろうか。ウィーン国立歌劇場が上演したのはR. シュトラウス《ナクソス島のアリアドネ》、ワーグナー《ワルキューレ》、そしてモーツァルト《フィガロの結婚》だった。

注目は《ナクソス島のアリアドネ》に一たとえ多くのオペラ・ファンが他の2つを聴きたがったとしても一集まった。ウェルザー＝メスト辞任でマレク・ヤノフスキが振ることになったが、その指揮は見事に整ったものだった。プリマドンナ＝アリアドネはグン＝ブリット・パークミンで、ツェルビネッタはダニエラ・ファリーというように華やかなメンバーというわけではなかったが、実力は十分以上だった。ベヒトルフによるこまやかな演出もあって洗練された上演が行なわれた。

だが上演の華やかさということになると、《ワルキューレ》こそが2016年日本公演の目玉だった。アダム・フィッシャーはひきしまった指揮でウィーンのワーグナーの豊かな響きを作り出したし、スヴェン＝エリック・ベヒトルフのスタイリッシュな演出が圧倒的な音楽を支えた。そしてブリュンヒルデを当代一のニーナ・シュテンメが歌い、ヴォータンを強力な個性のトマス・コニエチュニーが歌って、最高の水準が実現した。ウィーン国立歌劇場がこの作品を日本で上演したのは初めて

だったのだが、改めてウィーンのワーグナーの魅力を知らしめたのではなかったろうか。

《フィガロの結婚》はこれまでもウィーン国立歌劇場が定番のように日本で上演してきたモーツァルトで、昔からのジャン・ピエール・ポネル演出によるプロダクションでの上演だった。歌手たちも、アルマヴィーヴァ伯爵はイルデブランド・ダルカンジェロが歌ったものの、特にスター歌手を集めたというわけではなかった。スターは指揮壇にいた。リッカルド・ムーティは、昔からモーツァルトの優れた指揮者として定評があり、ウィーンやザルツブルクで人気になっている。その力が、横浜でも示されることになった。ムーティとウィーンが組んだモーツァルトの魅力が発揮された上演だったと、すこぶる評価の高い《フィガロの結婚》になった。

新国立劇場や日本の歌劇団による公演の質が上がり、水準の高いオペラの日常化が進行しているが、ウィーン国立歌劇場日本公演は、昭和のころのイタリア歌劇団やミラノ・スカラ座公演などの、特別なお祭りとしてのオペラ公演も、いまま活発に行なわれているのを示した。確かに日本のオペラ上演は、重層的に行なわれている。祭りは決して安価ではないが、聴けるのはウィーン国立歌劇場で、いまなお圧倒的な力を持っていて、日常的上演とは一線を画している。日常が向上していてもなお、祭りは意味を持っていた。

■ マリンスキー・オペラの2つのオペラ

ウィーンの国立歌劇場とフォルクスオーパーは数年置きに日本公演を行なっていて、オペラ・ファンに親しまれているが、それに負けないくらいおなじみになっているのが、サンクトペテルブルクのマリンスキー・オペラだ。オペラ劇場というよりそれを率いるワレリー・ゲルギエフの個性が、いつも強い

印象を残す。ゲルギエフによってこの歌劇場はソ連からロシアへの転換を生きのび、世界化した。これまでの日本公演はすべて、このおそろしくタフな指揮者とともに行なわれている。もちろん2016年の10月も、マリインスキー・オペラはゲルギエフと一緒に、日本にやってきた。

これまでの日本公演で《ニーベルングの指環》全曲や《戦争と平和》《炎の天使》など大胆な演目を取り上げてきたマリインスキーだが、2016年は《エフゲニー・オネーギン》と《ドン・カルロ》の2つを上演した。東京と、《オネーギン》は京都でも上演している。もちろん、どちらも全公演をゲルギエフが指揮した。

《エフゲニー・オネーギン》は「キーロフ」と呼ばれていたころから、マリインスキー・オペラが最も得意にしている、日本でも上演してきた演目だ。古い言い方をするなら「十八番」のオペラということになる。アレクセイ・ステパニユクによる演出は、斬新ではないが美しく、演劇的な充実も見られた。世界で活躍する歌手をつぎつぎに輩出してきたマリインスキー劇場だが、今回もタイトル・ロールにアレクセイ・マルコフ、レンスキーにディミトリー・コルチャックを揃えて、悪くない陣容だった。タチアーナもスター級ではないとしても、水準を越えたソプラノが歌っていた。舌を巻くのはゲルギエフの巧みな指揮で、ロシアの抒情性を余すところなく響かせる。たとえこの指揮者を気に入っていない人でも、チャイコフスキーのオペラ、特にこの《オネーギン》は認めるほかないはずだ。そしてマリインスキーとゲルギエフは、確実にこの公演を成功させることになった。

ゲルギエフとマリインスキーは、これまでもヴェルディには力を入れていて、今回の《ドン・カルロ》も切り札の一枚と見てもいいくらいだった。ジョルジオ・バルベリ

オ・コルセッティの演出は、シンプルな舞台に密度の濃い演技の、凶抜けてはいないものの、きちんとした上演を生み出していた。歌手はフェルッチョ・フルラネットのフィリップ、アレクセイ・マルコフのロドリゴ、ミハイル・ペトレンコの宗教裁判長と、低い男声をしっかり固めた布陣だった。女声だってこの劇場の水準を保つ歌手たちが揃えられていた。それでも《オネーギン》のように大成功というわけにはいかなかった。タイトル・ロールを歌ったヨンファン・リーは世界中でこの役を歌っているテノールで、決して悪くないし、今回もきちんと歌った。ただ多くのオペラ・ファンには2011年の大変だったメトロポリタン・オペラ日本公演の《ドン・カルロ》での、同じ役のイメージが残っていたのかもしれない。

ゲルギエフとマリインスキー・オペラの日本公演は10月で、ウィーン国立歌劇場と同じころだった。そして2016年の秋は、東京のオペラの祭りの季節となった。

■ 秋のイースター音楽祭

ヘルベルト・フォン・カラヤンが始めたザルツブルクのイースター音楽祭は、現在も復活祭の季節に行なわれている。復活祭だから毎年3～4月で、春の訪れを告げる、あるいは春の訪れを待つ音楽祭ということになる。その音楽祭が、2016年の11月に東京でワーグナーを上演した。サントリーホール「ホール・オペラ」として上演されたのは《ラインの黄金》だった。この後年を追って《ニーベルングの指環》が上演されてゆくはずだ。

イースター音楽祭のオーケストラは、カラヤン時代からベルリン・フィルだったが、ベルリン・フィルはその後バーデンバーデンに移って、そこで独自のイースター音楽祭を開いている。ザルツブルクでは現在ドレスデン

のシュターツカペレが音楽祭のオーケストラになっている。指揮するのは当然シュターツカペレ・ドレスデンの音楽監督クリスティアン・ティーレマンだ。

ザルツブルクのイースター音楽祭は、世界中から富裕層が集まる、大変料金の高い音楽祭として知られている。日本で公演も現地よりずっと安価というわけにはいかず、誰もが行き易い料金ではなかった。超満員にはならなかったが、熱烈なファンが《ラインの黄金》にやってきた。ワーグナーの熱烈なファン、そしてティーレマンの熱烈なファンだ。誰もが認める指揮者でないと、ティーレマンは独自の個性で熱狂的なファンを集めている。ザルツブルクでも東京でも、ファンは「ティーレマンのワーグナー」に夢中になる。

《ラインの黄金》はオペラというよりも、《ニーベルングの指環》という大作の序夜で、いわば前置きのようなところがある。人は感動するためではなく、音楽のスペクトルを求めるのだが、確かにティーレマンとシュターツカペレ・ドレスデンによる《ラインの黄金》はそのためにうってつけの演奏者ということになりそうだ。

重い音の、堂々たる響きで《ラインの黄金》は集まったファンを喜ばせ、これから続くであろう《ワルキューレ》や《ジークフリート》への期待を抱かせるものになった。「ホール・オペラ」なので、どちらかといえばコンサート形式に近いのだが、東京でもうひとつの《指環》が歩み始めた。ティーレマンとシュターツカペレ・ドレスデンの《指環》として、ワーグナー・ファン、ティーレマン・ファンを興奮させる秋が定着していきそうだ。「東京・春」もワーグナーが続いているので、春も秋もワーグナーの祭りが行なわれる季節になった。

■ スターとプラハ国立歌劇場

秋に日本公演を行なったのはウィーン国立歌劇場とマリインスキー・オペラにとどまらなかった。毎年のように公演を行なっているチェコのプラハ国立歌劇場が、2016年の11月に日本で上演したのは《ノルマ》と《魔笛》だった。

ウィーン国立歌劇場やマリインスキー・オペラが文化や芸術を旗印にしているのに対し、旧東欧時代から変った時以来、プラハの劇場の日本公演は、興行の性格が強い。それはそれで、日本の聴衆に受け入れ易いものかもしれない。今回の公演で目立ったのは、《ノルマ》のタイトル・ロールをエディタ・グルベローヴァが歌ったことだった。長いキャリアも終りに近づき、世界のオペラの第一線からは退きつつあるが、知名度は抜群というスターが歌えば、日本の多くのオペラ・ファンが歓迎する。興行としてのオペラが成功する可能性が大きい。実際成功したのではなかったらどうか。

もうひとりのノルマはディミトラ・テオドッシュウで、グルベローヴァほどではないとしても、このソプラノも日本での知名度を持っている。

ウィーン国立歌劇場やマリインスキー・オペラとは別の、新国立劇場や二期会の公演とも性格が違う、興行としてのオペラもまた日本のオペラ界を支えている。スターを看板にした《ノルマ》とわかり易い《魔笛》の、これからオペラを楽しもうという人たちにも手の届く、比較的リーズナブルな料金設定によって、このプラハ国立歌劇場日本公演は、成功を収めたのではないだろうか。

興行としてのオペラではもうひとつ、「ローマ・イタリア歌劇団」と銘打った一座による《ラ・ボエーム》の公演もあった。こちらは春に、東京だけでなく、神戸や福岡な

どでも公演が行なわれた。スポレート音楽祭のメンバーを中心に組まれたイタリアのグループとのこと。これに知名度のあるカルメラ・レミージョのような歌手を組合せての公演だ。

日本は、というより東京は、ウィーン国立歌劇場のような世界の一流歌劇場が公演する

だけでなく、さまざま水準のオペラが上演される、世界でも稀にみるオペラ都市となっている。中国でのオペラ公演が急速に盛んになり、東京が東アジアで一番のオペラ都市であり続けられるかどうかはわからないが、いまのところ、オペラ上演の層は厚い。料金の層も。